三重県明和町

第６次坂本古墳群発掘調査概要

【調査主体】：明和町斎宮跡・文化観光課文化財係【調査期間】：令和３年（2021）４月15日～５月17日

（※工事立会は８月29日まで断続的に実施）【調査面積】：本調査：440㎡

１．調査の経緯と経過

周知の埋蔵文化財包蔵地である坂本古墳群の範囲内において、宅地造成が計画されたことに伴う発掘調査である。計画段階で町と開発事業者との間で遺構の保存が可能かの協議を経て、団地内の道路部分などについて調査を実施することとした。また、調査後の施行段階において、道路側溝工事や外周のコンクリートブロック積み工事等の部分についても調査および工事立会を実施した。

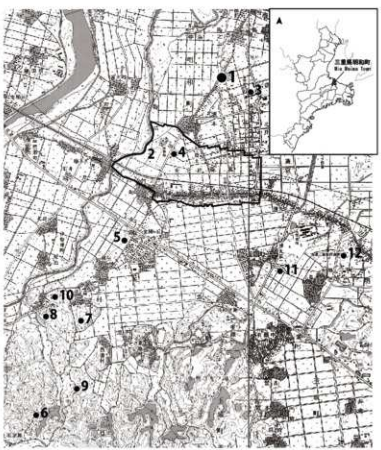
２．位置と環境

第１節　地理的環境位置と地形

坂本古墳群（１）は、三重県多気郡明和町大字坂本字粟垣外・西垣外に所在し、現在の大字坂本と大字馬之上の境界付近に位置している。西側には県道南藤原･竹川線が通り、地元では「御糸道」と呼ばれており、祓川に沿って斎宮周辺と海岸部の集落をつなぐ道である。周辺には中海集落があり、古代地名である「麻績郷」の中心部「中麻績」が転じたとも言われ、集落には式内社の麻績神社も所在している。地形的には、町内を南西から北東に向かって傾斜していく洪積台地（明野台地）上に位置しており、標高は８ｍ前後である。坂本古墳群西側には旧祓川が形成した河岸段丘が形成されており、現在水田が広がっている氾濫原との比高差は約２ｍとなっている。

第２節　歴史的環境

町内では500基を超える古墳が確認されており、中期から終末期にかけて多数の古墳群が形成されている。古墳群の多くは後期以降に造られたもので、小型の円墳・方墳が主である。町内の古墳群の立地は、大別して町南部の丘陵（玉城丘陵）上のものと、台地（明野台地）上のものとに分類でき、坂本古墳群は後者である。台地上に立地する古墳群の多くは河岸段丘縁辺に位置する特徴がある。こうした立地上の分類は埋葬施設にも表われており、丘陵上の古墳群は横穴式石室を採用する古墳群があるのに対し、台地上の古墳群では木棺直葬を採用している。周辺の古墳群は、東垣外古墳群（３）、塚山古墳群（４）などがある。塚山古墳群の一部を除き、ほとんどが後世の削平をうけている埋没古墳である。古墳群の多くは後期以降に造られた小型の円墳・方墳が主体であるが、坂本古墳群では前方後円墳・前方後方墳が造営されていることから、周辺の盟主墳と考えられる。なお、古墳群に対応する同時期の集落は町内においてわず



第１図　周辺の主要遺跡地図（国土地理院1:50000「松阪」から）

１：坂本古墳群、２：史跡斎宮跡、３：東垣外古墳群、４：塚山古墳群、５：辰ノ口古墳群、６：上村池古墳群、７：天王山19号墳、８：大塚１号墳、９：高塚１号墳、10：神前山１号墳、11：北野遺跡、12：史跡水池土器製作遺跡

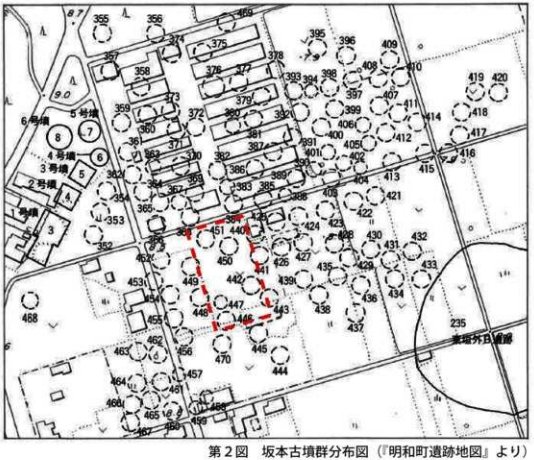
かに確認されているのみで、古墳群周辺でまとまった集落跡は確認されていない。

第 3 節　坂本古墳群について

坂本古墳群は古くから地元で「坂本百八塚」と呼称され、世古口藤平の『神三郡神社参詣記』によれば刀剣が出土したことなどが記述されている。また、坂本 1 号墳に関しては「金鶏伝説」が伝承されており、地元で信仰の対象であったようである。昭和期には太平洋戦争に伴う食糧増産の希求を受け、昭和 17 年頃から斎宮土地開発営団によって多くの墳丘が削平されてしまった。しかし、当時三重県史跡名勝天然記念物調査会の委員であった鈴木敏雄氏の尽力により、坂本 1 号墳をはじめとする 6 基の古墳が保存された。削平以前の古墳群の様相については、鈴木氏の『上御糸村考古誌考』（※考古誌考と略称）に詳述されており、東垣外古墳群を含めた古墳群の分布が把握できるとともに、いくつかの古墳は形状や出土遺物も克明に記録されている。さらに、米軍が戦後の昭和 23 年～ 27 年頃に撮影した航空写真からは、古墳の周溝のソイルマーク（痕跡）が明瞭に確認できることが指摘されている。こうしたこれまでの先行研究から、坂本古墳群は 123 基からなる古墳群で、南方の東垣外古墳群 30 基を含めると、確認できるものだけでも 153 基におよぶ大規模な古墳群であったことが判明している。

明和町では坂本古墳群においてこれまでも発掘調査を実施してきた（表 1 参照）。本発掘調査地と道路を挟んだ西側部分は三重県教育委員会より県史跡指定（平成 16 年 1 月 19 日）を受けており、明和町が歴まち事業の一環として古墳公園を整備し、坂本 1 号墳をはじめ計 6 基の古墳を保存するとともに、史跡外ではあるものの前方後円墳であると考えられる坂本 5 号墳についても公園内で一体的に保存が図られている。坂本 1 号墳は、これまでの発掘調査から 7 世紀前半に築造された全長 38.0m の前方後方墳で、木棺直葬が採用されたことが明らかになり、棺内からは金銅装頭椎大刀（平成 13 年 3 月 27 日付、三重県指定有形文化財）のほか直刀や横瓶や提瓶が出土した。7 世紀段階の柳田川以南の古墳分布を照覧しても突出した規模であり、当該期に前方後方形を呈する古墳を築造する例は県内では確認できない。さらに副葬品として出土した金銅装頭椎大刀は全国的にも出土事例が 100 例ほどの希少なもので、被葬者と大和朝廷との関係性を伺わせるものである。こうしたことから坂本 1 号墳の被葬者は、当該期の明和町を含めた南勢地方の盟主であったと考えられる。そして、坂本古墳群の南方約 1 k m には史跡斎宮跡が存在しており、斎宮との関連性について今後の調査・研究の進展も含め注視すべき点である。

また、近年の史跡外の調査から、1 ～ 4 号墳などと同一の主軸方向を志向する一群と、異なる一群があり、古墳群内にも小グループが存在する可能性も指摘されている。



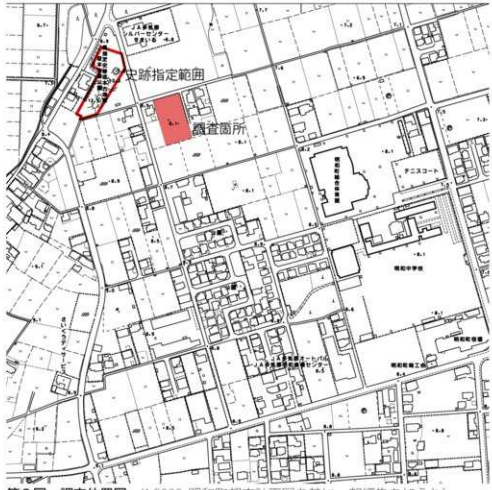
第 2 図　坂本古墳群分布図（『明和町遺跡地図』より）

3．遺構

第１節　調査の経過

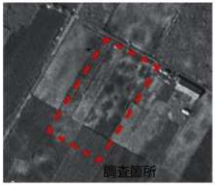
調査地内の古墳は、既述のとおり戦中に大規模な削平を受け、戦後は家畜舎が建設・解体されたこともあり、現況として古墳を視認することはできない。調査前には、事業地を踏査したが遺物等を表採することはあまりできなかった。

調査はまず重機による表土の除却を行った。遺構を検出できたのは道路予定地の調査部分で概ね現況面から 0.2m～ 0.4m下である。地山は黄褐色粘質土で、調査区全域にわたって安定して続いている。遺構検出以降は、作業員によって人力で掘削を行った。



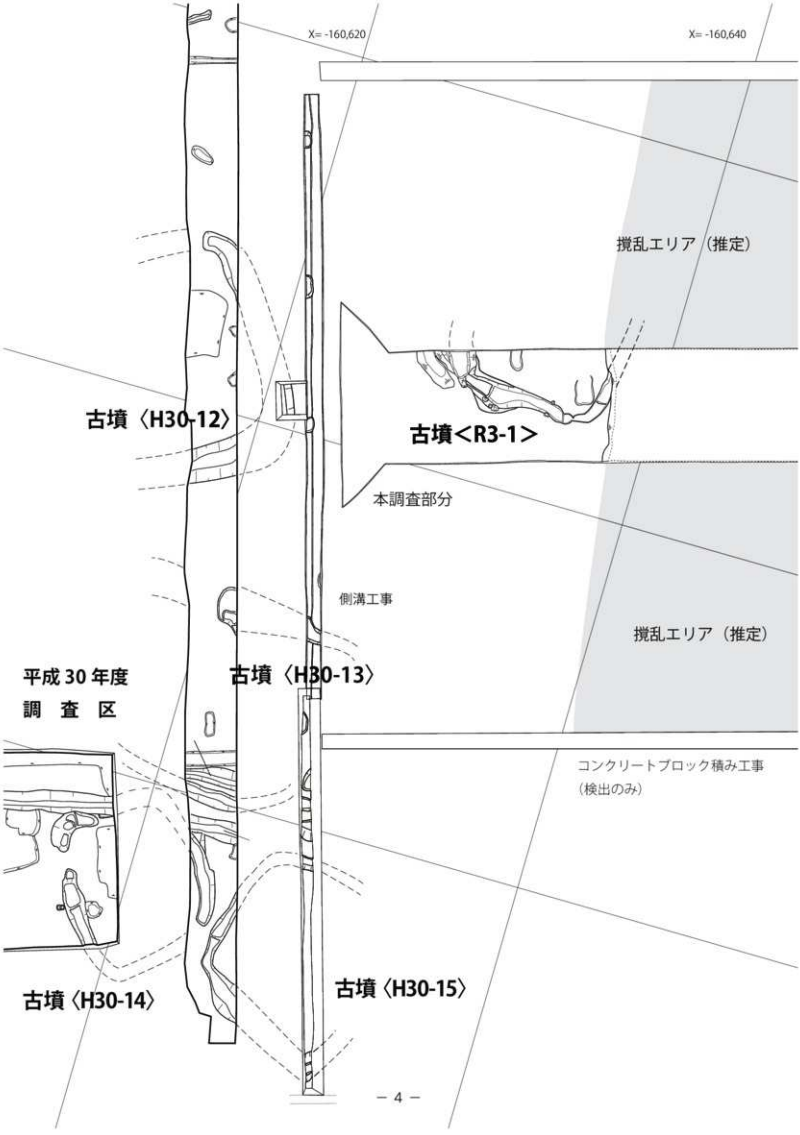
第３図　調査位置図（1:5000 明和町都市計画図を基に一部編集を加えた）

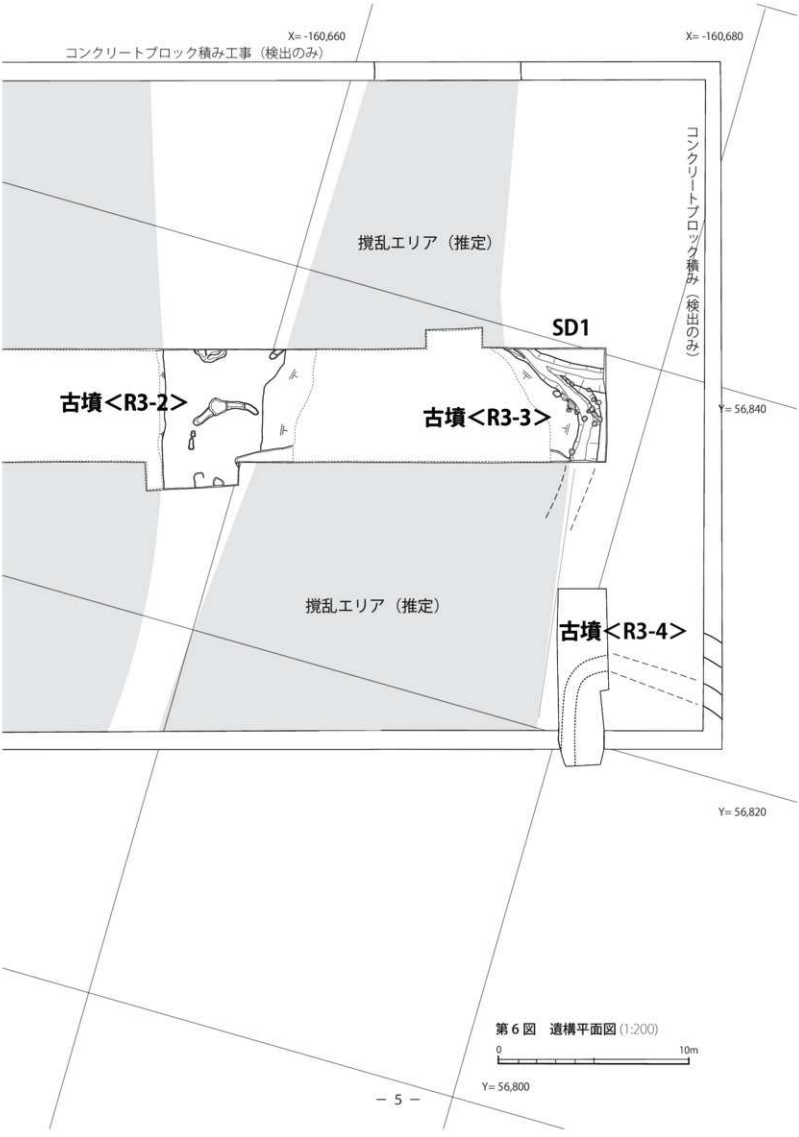
第５図　『上御糸村考古誌考』
「阪本北郊古墳分布図」（再トレース）



第４図　周辺航空写真
（昭和 27 年撮影・国土地理院提供）

航空写真からは、古墳の周溝だったと推定される部分が白色の筋状に浮かびあがっている様子が看取できる。今回の調査地点においても７～８基程度のソイルマークが確認できる。


X= -160,620
X= -160,640
撹乱エリア（推定）
古墳〈H30-12〉
古墳＜R3-1＞
本調査部分
側溝工事
撹乱エリア（推定）
平成 30 年度
調　査　区
古墳〈H30-13〉
コンクリートブロック積み工事
（検出のみ）
古墳〈H30-14〉
古墳〈H30-15〉



第 6 図　遺構平面図 (1:200)

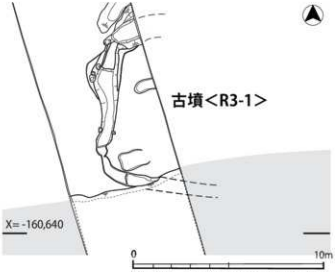
第２節　遺構

今回の調査では古墳（周溝）を４基、溝１条、土坑１基を確認した。なお、調査で古墳の周溝とした溝は一部のみであり、中には出土した遺物がわずかで時期などの詳細を判断することが難しいものも含まれる。こうした状況ではあるものの、古墳としての比定に際しては、先述の鈴木氏の調査記録および国土地理院が公開している過去の航空写真などを含め総合的に判断した。ただし、古墳の名称に関して周知の埋蔵文化財包蔵地として坂本古墳群は「坂本１～６号墳（遺跡番号：３～８）、７～125 号墳（遺跡番号：352 ～ 470）」と埋没古墳を含めて遺跡名称と遺跡番号を付与しているものの、調査で古墳としたものとこれら従来の周知の埋蔵文化財包蔵地との対応関係について、必ずしも全てを断定することができないことから、今回検出した古墳に対しては発掘調査年度を付して「古墳 R3-○」と表記することとした。

第３節　古墳（周溝）・溝

（1）古墳 R3-1（第７図）

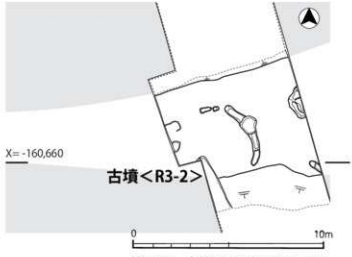
調査区の北側で検出した。撹乱を受けているが平面プランから方墳と判断した。調査区の東側に延びていくと考えられる。南北軸の溝の内々間で約6.6mを測る。西辺は、周溝の幅が 0.3m～ 1.5m、深さは検出面から 0.1m～ 0.7mで、南辺は幅 0.6m、深さは 0.1m～ 0.3m、北辺は撹乱を受けて幅は不明であるが、深さは 0.8m～ 0.9mである。周溝は北へ向かって深く掘削されている傾向である。周溝からは土師器の細片が出土したのみで、時期を決定しがたい。



第７図　古墳 R3-1 平面図 (1:200)

（2）古墳 R3-2（第８図）

調査区の中央部で検出した。途切れながらであるが弧状に溝が巡ることから、円墳と判断した。南側は撹乱を受けており、全体がわからないものの、溝の内側で直径約４mを測る小形の円墳である。幅は、0.3m～ 0.5m。深さは検出面から 0.1m～ 0.3mである。周溝内からは、土師器の杯の一部が出土しているが、造営の時期決定はしがたい。



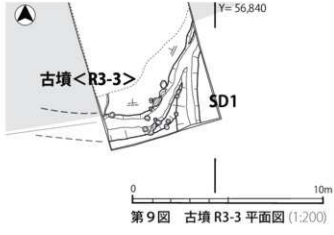
第８図　古墳 R3-2 平面図 (1:200)

（3）古墳 R3-3（第９図）

調査区の南側で検出した。周溝の北側まで撹乱が及んでいるがかろうじて検出することができた。南側で溝が屈曲していることから方墳と判断した。規模は不明ながら、南辺の溝の幅は 1.3m、深さは検出面から 0.4mで、東辺では幅 1.0m、深さ 0.5mである。周溝からは土師器片が出土したのみで時期決定はしがたい。

（4）SD１（第９図）

溝１条については、古墳 R3-3 を切るもので、調査区の南側および東側に延びる。溝は幅 0.9m～ 1.3m、深さは検出面から 0.5m～ 0.8mで北へ向かって深くなる傾向である。土師器の細片が出土しているが時期の決定は難しい。あるいは、古墳の周溝である可能性もあるが、断定はできない。



第９図　古墳 R3-3 平面図 (1:200)

第４節　工事立会に伴う調査

本調査終了後の宅地造成工事に伴い、調査区の北側で側溝敷設工事ならびに下水管引き込み工事、調査区の東西および南側の外周部分でコンクリートブロック積み工事ならびに既存井戸の撤去工事が行われ、工事立会を実施した。コンクリートブロック積み工事では、掘削深度が浅く遺構の検出のみにとどめた。

部分的な調査ではあったが、平成 30 年度に実施した事業地北側の調査成果とも対応する遺構を確認することができた。

古墳Ｒ3-4（第６図）

造成工事に伴う既存井戸の撤去工事ならびに外周のコンクリートブロック積み工事の工事立会時に調査区の南西端で検出したものである。部分的な調査であり、既存の井戸により破壊を受けていたため、詳細は不明であるが、過去の航空写真などから古墳の周溝の可能性が高いと判断した。仮に、周溝であった場合、幅 1.0mで、深さは 0.5mを測る。南東部で検出した古墳で、後世の攪乱を大きく受けているも検出時に、周溝埋土上面で土師器の杯片が出土しているが、時期は決しがたい。

古墳 H30-12（第 10 図）

下水道引込み工事に伴い調査区の北端で検出したものである。東西方向の溝で検出したのは溝の南側の掘方である。平成 30 年度に検出した古墳 H30－12 に対応する溝と考えられ、深さは 0.4m以上ある。今回の調査で対応する南辺の周溝を見つけることができ、前回調査時に推定した規模よりもやや大きいようである。周溝からは土師器片が出土した。

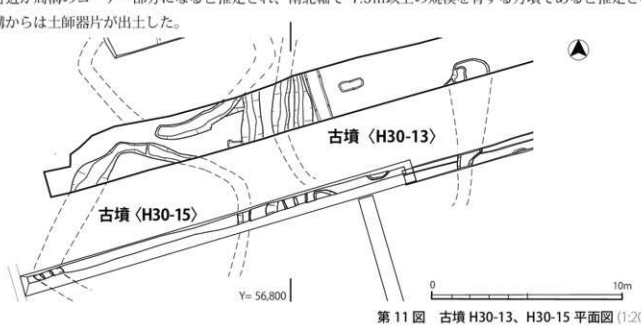
第 10 図　古墳 H30-12 平面図 (1:200)

古墳 H30-13（第 11 図）

事業地北側の側溝敷設工事に伴い検出した。南北方向の溝で、幅 0.7m、深さ 0.4mである。平成 30 年度に検出した古墳 H30－13 に対応する溝と考えらる。周溝からは須恵器の杯蓋片と土師器片が出土した。

古墳 H30-15（第 11 図）

事業地北側の側溝敷設工事に伴い検出した。南北方向の溝で、西側の溝は幅 1.3m、深さ 0.4mで、東側の溝は幅 0.6m、深さ 0.5mである。平成 30 年度に検出した古墳 H30－15 に対応する溝と考えられ、西側の溝は検出部分付近が周溝のコーナー部分になると推定され、南北軸で 7.5m以上の規模を有する方墳であると推定される。周溝からは土師器片が出土した。



第 11 図　古墳 H30-13、H30-15 平面図 (1:200)

4．まとめ

今回の調査から次のことが明らかになった。まず、新たに古墳４基が確認され、123 基からなる坂本古墳群の内、これまで発掘調査で確認できた古墳は３６基以上となった。また、工事立会時の追加調査で、平成 30 年度に検出していた古墳と対応する遺構も確認することができ、平面規模をより正確に把握することができた。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地として把握されている古墳との対応関係については比定が困難であった。

今回確認した古墳の内１基は円墳であった。これまでの調査から、当該古墳群の古墳の平面プランは、前方後方墳１基（坂本１号墳）、前方後円墳１基（坂本５号墳）、方墳 30 基、円墳４基となる。従来より当該古墳群は方墳を主体とすることが指摘されてきたが、一定数の円墳も含むことがわかった。次に今回確認した各古墳の造営時期であるが、調査では出土遺物が極めて少なくいずれの遺構も時期決定ができなかった。今後の周辺地域での調査の進展を待つとともに、過去の調査成果とあわせた検討を進めていく必要がある。

5．地中レーダー探査

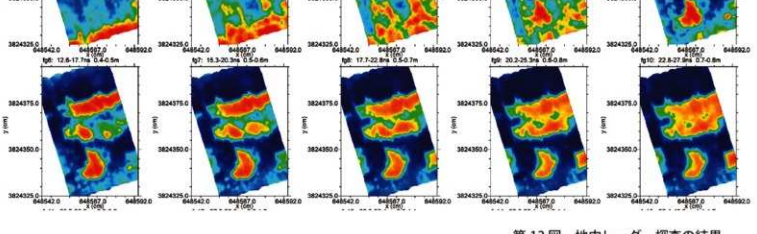
今回の調査地は既述の通り坂本古墳群の範囲に位置し、過去の航空写真や鈴木敏雄氏の『考古誌考』などから事業地内に多数の埋没古墳が存在していることが予想された。調査対象部分は、事業者との協議の結果、道路敷設などによって地下遺構に影響を及ぼす範囲とし、事業地全てに対して発掘調査を実施しなかった。

しかし、事業地全体の埋没古墳の分布状況を把握することは、今後の坂本古墳群全体の様相を検討するために重要であると考え、調査に先立ち地中の遺構分布を知るために地中レーダー探査を実施することとした。

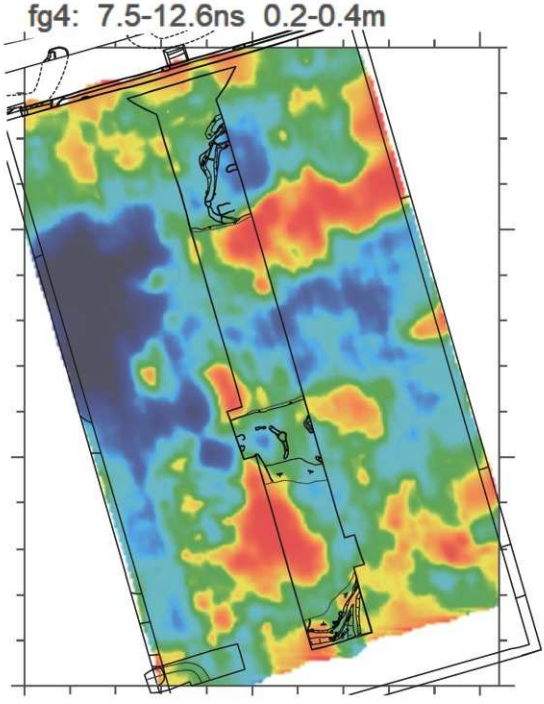
地中レーダー探査は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室の金田明大氏、山口欧志氏、同所客員研究員岸田徹氏に依頼し、ご多忙の中来県いただいて調査を実施することができた。

残念ながら、事業地の中央部では過去の養豚場建設および解体に伴い、大きく攪乱を受けていたため、当初期待された事業地全体での古墳等の分布状況を把握することはできなかった。ただし、地中レーダー探査実施後の、本調査による遺構検出の成果と照合（図 13 参照）すると、古墳 R3-1 については、レーダーの反応と対応関係が伺え、調査区東側に遺構が及んでいる可能性が看取できる。

今後も、当該古墳群でやむを得ず調査が生じた場合、掘削を伴う調査の前に今回のような地中レーダー探査を行うことによる遺構分布の実施は検討に値する。また、県指定史跡坂本古墳群内においても、未調査で遺構保存がなされている部分があることから、こうしたエリアでも積極的な導入を検討していきたい。



第 12 図　地中レーダー探査の結果



第 13 図　地中レーダー探査（地上から 0.2－0.4m下）結果と発掘調査で検出した遺構との照合図

地中レーダー探査の実施状況

地中レーダー探査の実施状況

＜写真図版＞

写真図版１　調査区全景（北から）

写真図版２　調査区全景（南から）

写真図版３　古墳R3-1（南東から）

写真図版４　古墳R3-1（南西から）

写真図版５　古墳R3-2（南西から）

写真図版６　古墳R3-3（南西から）

写真図版７　側溝工事立会部分①（西から）

写真図版８　側溝工事立会部分②（西から）

写真図版９　ドローン撮影による調査区全景（下側が東）

写真図版10　古墳R3-1（南から）※ドローン撮影

写真図版11　古墳R3-1（南東から）※ドローン撮影

写真図版12　ドローン撮影による調査区遠景（南東から）
※ドローンによる撮影は明和町役場 AIRIS（大西、上村）の協力を得て実施した。

写真図版13　発掘作業風景

県史跡範囲内			
年度	西暦	次数	備考
H7～8	1995～1996	県史1次	農地開墾
H8	1996	県史2次	農地開墾
H9	1997	県史3次	農地開墾
H10	1998	県史4次	農地開墾
H12	2000	県史5次	範囲確認調査
H15	2003	県史跡指定（H16.1.19）	
H23	2011	追加指定（H24.3.9）	
H25	2013	県史6次	計画調査
H25	2013	県史7次	下水道
H27	2015	県史8次	町道整備

その他			
年度	西暦	次数	備考
H3	1991	1次	試掘、共同住宅建設 方墳1基
H24	2012	2次	試掘、太陽光発電 周溝複数確認
H25	2013	3次	試掘、団地造成 古墳なし
H26	2014	4次	介護施設建築
H30～R1	2018～2019	5次	団地造成
R3	2021	6次	団地造成

表１　坂本古墳群発掘調査一覧表

報告書抄録

ふりがな	だいろくじさかもとこふんぐんはっくつちょうさがいよう
書名	第６次坂本古墳群発掘調査概要
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	味噌井　拓志
編集機関	明和町（斎宮跡・文化観光課）
所在地	〒515-0332　三重県多気郡明和町大字馬之上945番地　Tel 0596(52)7126
発行年月日	西暦2022年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
坂本古墳群	三重県多気郡明和町大字坂本	24442	－	34°33′30″	136°37′90″	2021.4.15～2021.5.17	440	宅地造成

＜凡例＞

1．測量にあたっては、世界測地系第Ⅵ座標系を基準とした。
2．本書での報告内容はあくまで概要であり、今後の検討の結果によって内容が変更される可能性がある。
3．本書に掲載した遺構平面図は完掘状態で図化したものであり、遺構の新旧関係と平面図が対応していない部分がある。

＜参考文献＞

明和町教育委員会『坂本古墳群発掘調査概報』2001年、明和町『三重県指定史跡　坂本古墳群発掘調査報告』2017年
明和町『明和町史　史料編　第一巻　－自然・考古－』2004年、鈴木敏雄『三重県多気郡上御糸村考古誌考』1949年
三重県教育委員会『古里遺跡・斎王宮址』1974年、明和町『明和町遺跡地図』1988年、明和町『第５次坂本古墳群発掘調査概要』2020年

＜謝辞＞

現地での発掘調査に際しては、開発申請者である株式会社セゾンホームおよび工事業者である中村土建株式会社からご理解とご協力をいただいた。また、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室の金田明大氏、山口欧志氏、同所客員研究員の岸田徹氏には発掘調査前に地中レーダー探査を実施していただき、調査にあたり貴重なデータをご提供いただくとともにご指導をいただいた。三重県埋蔵文化財センターからは整理作業に際し、ご指導・ご支援をいただいた。合わせて、下記の方々からもご指導・ご協力をいただいた。記して感謝したい（敬称略・組織名は当時）。
山中由紀子・川部浩司・小原雄也（斎宮歴史博物館）

第６次坂本古墳群発掘調査概要
令和４年（2022）３月31日
編集・発行：明和町
印刷：光出版印刷株式会社